

終 回

いれずみ物語

— 30 —

小野 友道

文身文化

—— 白川 静の漢字の世界 ——

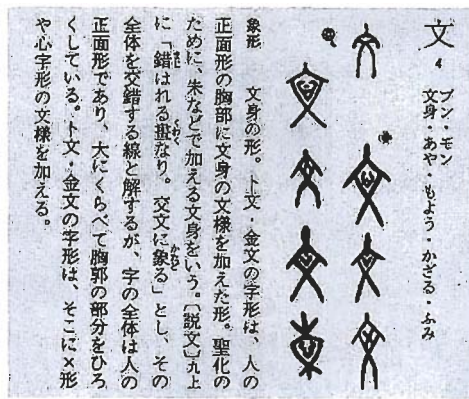
礪川全次の『刺青の民俗学』、江馬 務の『現代風俗綜覧』に、それぞれいれずみが論じられている。いれずみは「民俗」なのか、はたまた「風俗」なのか。広辞苑によれば「民俗」は「人々の伝統的な生活文化、民間伝承 伝承文化」であり、「風俗」は「一定の社会集団に広く行われている生活上のさまざまなならわし」とある。

かつて施されていたアイヌの女性の口の周りの「ヌエ」、そして沖縄女性の指を飾っていた「針突」などのいれずみは、どちらかというとな民俗の範疇に入るであろうか。一方、江戸時代以降、鳶の者などに流行した「彫り物」、遊女の「いれぼくろ」などは、民俗というよりも風俗ととらえられるのが一般的であろうか。

多田道太郎は『風俗学』の中で、「わが国ではく下じもゝのならわしを研究するものに民俗学がある。これは、農村の不変の（比較的変わりにくい）文化を研究する学問である。恒常という観点から変わりにくい、変わりにくかった農業文化を見る。これに対し、風俗学は、変化という観点から都市文化を見るものである。大衆の日常生活の諸相を見るといっても、民俗学と風俗学とではかなりの違いがある。それらは

時には対立し、時には相補うものになるだろう」と述べている。いれずみの動機は、信仰・起請・刑罰・通過儀礼・権威・威嚇・化粧・ファッションなどなど、あまりに多種多様である。時には治療の手段としてさえ用いられたことがあった。このような多彩な動機から、それはある場合は民俗、また、ある例では風俗の範疇に入れることができるかもしれない。しかし、いずれかに定めることが難しい場合も少なくない。多田が指摘しているように、民俗と風俗は、時には相補うというか、あるいは重なり合う領域があるからなのだろう。

多田は続ける。「風俗学は、人々の信仰よりも感覚にかかわる学問であるともいえる。風俗とは社会の皮膚だといったのは戸坂 潤だが（『思想と風俗』）、人間社会を生体にとえるならわしからすれば、たしかに皮膚感覚にかかわるのが風俗というものである。色、匂い、かた——、そういう感覚にかかわるものが風俗を決定する。背骨とか腹とか、社会のイデオロギー中枢にかかわるものの比喩として使われてきたことばは、風俗とは、一応関係がない。末梢であり、瑣末であり、それこそ皮膚感覚と呼ぶよりしかたのないもの——、それが風俗である。……皮



『字統』より
白川 静著
平凡社発行

膚感覚の発達した人間のほうが、型としては大きな意味をもってくるだろう。感覚、表層のほうが深刻な意味をもつというのが、今日の逆説である」と。さすれば、いれずみの多くは風俗としてとらえられるのではないか。いれずみはまさに皮膚感覚そのものの産物であるからである。特に最近の若者のいれずみ（彼らはタトゥーと呼ぶ）はファッション性が強い。多田は「若い女性が奇抜ともいえるファッションで街を歩く。あれは、泣いているのだと思う。泣くかわりに、泣くにひとしい非合理的主張をしている。感覚的表層のうえに、彼女らの抑圧されたものの中身を表現している。セックス、味覚、触覚——こういうものが形を変えて、風俗として——社会的皮膚として、街にあらわれてくる。問題は彼女らが、ものの、事物の表面に表現しているもの（表現させられているもの）の深層を読みとることである」と指摘している。まさにいれずみは衣類であり、ファッションであり、皮膚に表現された魂の叫びであり、泣き声である。

*

いれずみの多様性は民俗学、風俗学を超えて、礫川が指摘するように芸術・犯罪学・文化人類学・日本古代史、さらに医学の研究対象となり得るとすれば、そこにいれずみ文化というものが存在するのではないか。

いや、そもそも文化とはなにか。森本哲郎は「日本ではおよそ＜文化＞の何たるかが、曖昧模糊としている」と指摘し、「＜文化＞という言葉は、＜文明開化＞がつづまってつくられ

た、という説がある。……黒船の到来、異国の文物、それにおどろいた日本人は、舶来のすべてを＜文化＞と思いこんだのである」としたが、学問的にはそれではすまされないと『哲学事典』を引用している。「英・独・仏語のいずれの場合も、＜文化＞概念はラテン語の cultura に由来し、もともと栽培を意味していたものが、転じて一方では教養を、他方ではある社会あるいは集団に固有の生活様式を意味するようになった。このうちドイツ語では教養的な意味がつよく、英語とくにアメリカ流の文化人類学では、生活様式的なものへの傾斜が大きい」とある。日本での「＜文化＞という言葉の使い方は、おそらくドイツふうの＜教養＞的価値といったイメージによっているのだろう」と森本は述べたが、「ところが、そのような哲学的なく文化＞解釈に対して、アメリカの学者、なかんずく文化人類学者は、＜文化＞の概念を拡大し、人類の生活様式すべてを含めて＜文化＞とした。こうして、学問の世界でも、＜文化＞についての定義は無政府状態となってしまった」と嘆いている。

*

一方、白川 静は「文」という文字は「ひとの創造した秩序や価値をいう語である」と述べ、「文明や文化というものはいうまでもなく翻訳語であるが、文のなかにその意味が含まれている」とした。「文」は中国では「多くの線や色によって構成される美しい文様」をいう。わが国の『大漢和辞典』には25の義が列せられているが、そのほか動詞の用法として「いれずみを

する」がある。つまり「文」は文様であり、その一つがいれずみなのである。それでいれずみは「文身」と書く。「文という字形は、その字形の成立した当時における文の概念を、字の意象のうちに示している。それはまぎれもなく文身であり、屍体聖化のための儀礼をあらわすものである」と白川は明言し、「文身は聖化と加入の儀礼に用いられる身体装飾」とした。『字統』の中で「文」は「文身の形。ト文・金文の字形（図参照）は、人の正面形の胸部に文身の文様を加えた形。聖化のために、朱などで加える文身をいう。……文は祭事に文祖・文考・文母のように先人に冠するという語で、文とは死者のいわば聖記号である。婦人のときは両乳をモチーフとして加えるので、爽・爽・爾はみなそれである」とした。さらに「文身は加入式の儀礼のとき、その聖化の方法として加えられる」もので、例えば「×形の文飾をひたい（厂）に加えて呪禁とするものが産（産）、その字の上部は文である」、そして「顔（顔）」、「胸・凶」なども凶礼のときに×形を加えて呪禁するのと同じであるという。

白川は「文という語のもつ歴史的位相は、この国の三千年にわたる文化史の事実を貫く背景をなしており、おそらくこれに匹敵しうるものを、他にみることはできないであろう。ことばはまた思想である。中国の文化を考えると、<文>のもつ語史的意義は、文の理念そのものとともに、その文化の本質と深くかかわるものであるように思われる」と述べている。「文」の古くからの、広くそして深い意味を考えると、文化の定義などあだやおろそかにできないが、白川も用いている「文身文化」は、確かに存在するといえるのではないか。

さらに、「文」とは別に、漢字の中にはいれずみと関係ある文字が少なくない。それは刑罰として存在した墨刑に由来する文字である。白川によると、「罪」は、「もと皐とかかれていた。自は鼻の象形、辛は入墨を加える針の形であるから、それは鼻に入墨する刑であったはずである。……始皇帝が、皐の字が似ていてまぎらわ

しいので、罪の字を作ってこれにかえたのだという」、あるいは「童」や「妾」もまた入墨とつながる文字で、「入墨はその針である辛の形によってあらわす。男にあっては童、女にあっては妾という。童は眼の上に入墨を加え、また声符として東、あるいは重を添えたもので、男の刑余者である。髪を結いあげることが許されず、それで幼童をも童という。……女はおそらく額に入墨を施したのであろう。その字は妾である」、また「僕」もそうであるらしい。「額の上部に大きな入墨をするのを、<鑿天の刑>という。僕の傍の部分、その鑿天の刑に用いる辛器の形を示しているものであろう」という。さらに、「憲」の文字さえいれずみからなのである。「害の上部は、害の字形に含まれている大きな把手のある入墨用の針、これで目の上に入墨する字が、すなわち刑罰の意であるから、のち法の義となった」とある。

いれずみの世界は広く、深く、そしてそれは古く、かつ新しい。だからこそいれずみを表現する語も多彩なのである。文身、黥、彫青、入墨、刺青、割青、膚筭、筭刺、刺文、彫り物、彫入、刺繡、入れぼくろ、がまん、もんもん、そしてタトゥーなどなどある。さらに、坪内逍遙は『当世書生気質』で花繡を、尾崎紅葉も『三人妻』で肉繡を、それぞれ“ほりもの”とルビしている。漱石の『吾輩は猫である』では、猫が洗湯（原文ママ）へ観察に出かけた。「入れ代わって飛び込んで来たのは普通一般の化物とは違って背中に模様画をほりつけている。岩見重太郎が太刀を振りかざして……」と、いれずみを「模様画」としゃれている。

今号の「文身文化」で終回となります。長い間ご愛読いただき、ありがとうございました。

（熊本保健科学大学・学長）

文献

- 江馬 務：『時代風俗綜覧』，政経書院，1935。
磯川金次：『刺青の民俗学』，批評社，1997。
塩崎文雄：『テキスト評釈』『刺青』，国文学，38；84-99，1993。
白川 静：『中国古代の文化』，講談社，1979。
白川 静：『字統』，平凡社，1984。
森本哲郎：『日本語 根ほり葉ほり』，新潮社，1995。